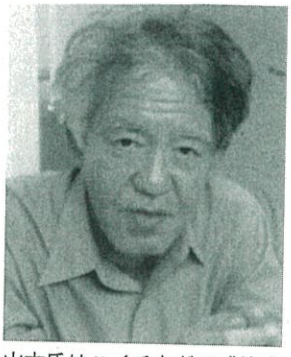
コロナとの共存を考える
連続インタビュー❷

「感染者の人数」に一喜一憂することの無意味さ

山本太郎
（長崎大学熱帯医学研究所教授）


山本氏はハイチなどで感染症対策に従事した経験を持つ

「マラソン」を走る覚悟を

この夏以降の状況が、いわゆる「第2波」なのか、それとも「第1波の続き」なのかは、何とも言えません。流行が第1波か第2波かということは、厳密に言えば、流行が収束してからしかわからないのです。

しかし一つだけ言えることがあるとすれば、大切なのは日々報じられる数字に一喜一憂することではなく、私たちはどこへ向かうのか、そして最終的に何を目指すのかを、しっかりと見定めることです。

「最終目標」は、人口の3～4割が新型コロナウイルスに対する免疫を持つ状態です。その状態にならないと、流行の収束には至らないでしょう。

しかしそれまでには、自然感染にせよ、ワクチンが完成し普及するにせよ、まだ時間がかかる。コロナ同様に飛沫感染するスペイン風邪の流行が2年間続いたことから推測すると、それには2年程度の期間が必要だと考えられます。

ですから、コロナとの付き合いは、いわば「マラソン」になります。マラソンには、ふさわしい走り方と心構えがある。医療崩壊を防ぐためにも、感染拡大の速度を遅くする必要がありますが、そうすればさらに時間がかかります。長期戦になるという覚悟を、今のうちに持っておかねばなりません。

重症者や死者を増やさないためには、たとえ収束までの時間を延

「感染者の人数」に一喜一憂することの無意味さ

ばすことになるとしても、感染拡大のスピードを抑えることが重要です。

ウイルスには、自然選択による淘汰の圧力が働きます。彼らは宿主がいなければ増えることができない。そのため、毒性が強いウイルスの場合、宿主がすぐに死んでしまうので、どんどん次の宿主へ移ってゆく必要があり、感染拡大のスピードも速くなります。

一方、毒性が弱いウイルスの場合は、宿主があまり死なないため、強い感染力を持つ必要がない。流行の速度を緩やかにすれば、強毒化したウイルスは淘汰され、生き残れなくなる可能性があるのです。

新型コロナウイルスに限らず、ウイルスや微生物を「根絶する」ことは困難です。微生物の大半は無害か、人間にとってむしろ益になるものですが、ごく一部が病気を引き起こす。しかし、そうした有害な微生物も、自然界のシステム全体の安定性には、なんらかの形で寄与している可能性がある。

ですから私は、ウイルスとの共生の道を探すのが望ましいと考えています。「感染者をゼロにする」ことは不可能ですし、それを目指している限り、10年経っても、20年経ってもコロナとの共存はできません。

今は、まだ「入り口」

新しいウイルスは、基本的に自然界から人間社会に入ってきて、パンデミックを起こします。その際に考えられるシナリオは、「人間が動物の棲む場所へ侵入する」か「動物の生息域が狭くなり、人里へ出てくる」かの2つです。今は急速な森林伐採や開発で、その両方が同時に起きている。人類の歴史は自然の開拓と不可分ですが、それがあまりにも速く大規模になると、歪みが生じるのは当然です。

このタイミングで新型コロナウイルスが現れ、急速に拡がった背景に、地球環境への負荷が高まっていることや、気候変動が激化していることがあるのは間違いないでしょう。

開発が急激に進んだ過去一世紀の間、人類はエボラ出血熱、エイズ、SARS、MERS、新型インフルエンザなど数多くの感染症に襲われてきました。自然破壊のペースを見直さない限り、今後も第2、第3のコロナが現れてきます。

私たちが気づいていないだけで、ウイルスは日々人間社会へ挑んでいて、その中からたまたま拡がりやすいものが流行する。今はグローバル化が進み、かつ人々が密集して住んでいるから、新型コロナが流行りました。しかし、仮に1万年前の社会に新型コロナウイルスが出てきても、100人程度の小さな集落で感染が拡がるだけで、パンデミックには至らなかったでしょう。現代社会においてコロナの感染が拡大したことは、ある種の必然とさえ言えます。

私たちが立っているのは、まだ入り口にすぎません。収束までの長い道のりを耐えるうえで、重要なのは正しい心構えと、適切な目標設定でしょう。

今求められているのは、感染者の命を守ることと、パンデミックで困窮している人々を支援すること、その両方です。「人命か経済か」ではなく、どちらもが大切なのです。

やまもと・たろう／'64年生まれ。長崎大学医学部卒業後、京都大学医学研究科助教授、長崎大学熱帯医学研究所助教授などを務め、現在同教授。専門は国際保健学、熱帯感染症学